館蔵品展「絵画は告発する / 特別展示　板橋の日本画」　展示作品リスト

会期：2017年4月8日（土）〜6月18日（日）　板橋区立美術館

「絵画は告発する」

第１章　プロレタリア運動の中で

本展では、当館の所蔵する1920〜60年代の絵画を通じて「絵画」が何を「告発」したのかを検証します。

1920年代、モダンな都市文化が花開く東京で、ベルリン帰りの芸術家・村山知義は破壊的なダダの要素を帯びた芸術を展開しました。村山は仲間たちと共に「マヴォ」を結成し、絵画のみならずパフォーマンスや商業デザイン、建築までをも手がける総合的な芸術活動を行いますが、価値観の違いなどからグループは分裂します。前衛美術運動の延長として彼らが出会ったのはプロレタリア運動でした。1925年には、プロレタリア美術を標榜する「造型」が結成され、1927年にロシアのリアリズム絵画を紹介する「新ロシヤ美術展」が開催されます。1929年にはプロレタリア美術家同盟が結成され、寺島貞志らによるロシアの社会主義リアリズムを意識した労働の様子や労働争議を描いた作品が発表されました。画家たちは機関紙の挿絵、ポスター、ビラの制作にも携わります。プロレタリア美術は、政治思想を大衆に伝えるという明確な目的を持った美術運動でした。そのため、1933年にプロレタリア運動が治安維持法違反で大弾圧を受けると、プロレタリア美術家同盟も解散しました。

作品名	作家名	制作年	寄託作品
赤い大地	村山知義	1928年	
プラウダを持つ蔵原惟人	永田一脩	1928年	○
蔵原惟人	永井潔		○
コムソモルカ	寺島貞志	1930年	

第２章　シュルレアリスムと戦争の影

1934年、プロレタリア美術は弾圧により終焉を迎えました。入れ替わるように流行し始めたのがシュルレアリスムです。第一次世界大戦後のヨーロッパで発生したダダイスムの流れを汲んだシュルレアリスムは、指導者のアンドレ・ブルトンによる思想運動として始まりますが、美術の分野にも展開します。マックス・エルンストやサルバドール・ダリによる作品は、これまでの日本の美術界には見られない新しい傾向であったため、若手の画家によるシュルレアリスム風の作品が次々と誕生しました。それらの作品には、誇張され、切断された身体の一部、生い茂る植物、果てしなく広がる地平線など、不穏な印象を与えるモチーフが描かれています。シュルレアリスムに影響を受けた絵画が集中して発表されたのは1930年代後半のことでした。1937年に日中戦争が開戦し、日本が長い戦争の時代へ突入する時期と合致しており、この章でご紹介する絵画は、閉塞した日本の状況を反映しているようです。これらを描いた当時20、30代の画家たちの多くは兵士として召集されており、戦地で亡くなる方もいました。

遅疑	伊藤久三郎	1933年	
悲劇の眼（凝視）	藤田鶴夫	1936年	
生誕譜No.1	小牧源太郎	1938年	
蒋介石よ何処へ行く	難波香久三（架空像）	1939年	
背徳	今井大彭	1937年	
作品	石井新三郎	1938年	
世紀の系図	浜松小源太	1938年	
悪夢	原田直康	1937年	

第３章　抑圧の時代と絵画

1940年の大政翼賛会、大日本産業報国会の結成をはじめ国民を戦争へと総動員する体制が確立し、その影響は美術界にも及びました。

1941年、シュルレアリスムの主導者とみなされていた画家の福沢一郎と、美術評論家の瀧口修造が治安維持法違反の嫌疑で逮捕されると、画家たちはシュルレアリスム風の作品の発表を控えるようになります。さらに裸体画や抽象画も時局にそぐわないとされた時代にもてはやされたのは「戦争画」でした。戦闘の場面を描いた作戦記録画など、軍の意向に沿った作品が軍主催の展覧会で発表されました。一方、井上長三郎は日本兵が太平洋上を漂流後、帰還したニュースを元に《漂流》（発表時は《魂の生還》）を描き、決戦美術展に出品しますが厭戦的だと判断され、撤去されています。

そのような状況で井上、麻生三郎、松本竣介ら８人の画家たちは会派を超え、新人画会を結成します。家族や配給の魚などの身近なモチーフを描き、緊迫した時代の中で自分たちのできる限りの展覧会を開催しました。

国や戦争そのものを批判することが許されず、表現や画材、時間の制限のある中で何を描くのか、それよりも描かないことを選ぶのか、画家たちはそれぞれに時代と向き合いました。

作品名	作家名	制作年	寄託作品
廃砲Ｂ「戦利品Ｂ」	佐田勝	1939年	
荒地	大塚睦	1940年頃	
黄昏に山羊は憩ふ	寺田政明	1943年頃	○
漁る人々	末永胤生	1941年	
働らく女達（市場へ）	竹中三郎	1941年	
漂流	井上長三郎	1943年（後年改作）	○
一子像	麻生三郎	1944年	
りんご	松本竣介	1944年	○
鉄橋近く	松本竣介	1943年	
自画像	末松正樹	1944年	
作品（1944.4.2）	末松正樹	1944年	
作品（1944.11.22）	末松正樹	1945年	
作品（1945.3.23）	末松正樹	1945年	
作品（1945.7.10）	末松正樹	1945年	
He's the King	国吉康雄	1947年	
Alley	多毛津忠蔵	1945年頃	

第４章　「戦後」の人体表現

1945年8月、15年間続いていた戦争が終わりました。しかし、一部の地域を除いて日本は引き続きアメリカ軍の占領下にあり、サンフランシスコ講和条約が発効される1952年までの間、プレスコードに基づく検閲が行われていました。戦闘状態から脱したものの、各地に戦争の傷跡が残り、食糧事情も悪い中で市民は生活を再建していきます。

美術界では、戦前からの公募団体が復活し、戦時下では描くことが許されなかった裸体画やシュルレアリスム、アブストラクトの作品も発表できるようになりました。戦災や戦地を体験した多くの画家たちが、終戦後の虚脱状態の中でモチーフとして選んだのは人体でした。この章でご紹介するいくつかの作品に見られる誇張された顔や身体の表現は、美的な対象とは程遠く、人間の欲や本性をむき出しにした醜悪なものに見えます。戦争という暴力的な極限状態を経た画家たちの関心は人間の内面へと向かい、その恐ろしさを暴きながら、人間とは何かを問いかけてくるようです。

灯の中の対話	寺田政明	1951年	
1948年	高山良策	1949年	
三人掛け	田中佐一郎	1947年	
家族	末松正樹	1949年	
女幻	古沢岩美	1947年	
聖喜捨	古沢岩美	1948年	
薪炭（戦時配給）	入江比呂	1942年	
群（米よこせ）	入江比呂	1946年	
胴体	麻生三郎	1966年	

作品名	作家名	制作年	寄託作品
像	糸園和三郎	1955年	
顔のうしろの顔	阿部展也	1957年	
The Sybarite—快楽を求める人—	漆原英子	1953年	
CLOWN	漆原英子	1956年	
女	芥川（間所）紗織	1955年	
自嘲	早瀬龍江	1951年	
追憶	白木正一	1952年	
殴られた彼	尾藤豊	1949年	
寓話	井上長三郎	1959年	

昨年度、ご寄贈いただいた杉本鷹、吉岡憲の作品をご紹介します。彼らは共に「職場の中から美術を、職場の中へ美術を」というスローガンをもとに結成された全日本職場美術協議会に参加し、1948年に東京・早稲田の杉本宅に創設された職美協中央美術研究所に携わりました。当時はまだ美術研究所が少なく、モデルを頼む余裕のある人もなかったため、研究所には仕事を終えた労働者や美大受験を控えた学生、画家など多くの人が集いました。この研究所には指導者として麻生三郎、井上長三郎らも迎えられています。

杉本鷹（1906—1962）は、大阪に生まれ、1930年にプロレタリア美術同盟に参加しました。その後1932年に上京し、二科会の研究所である番衆技塾で熊谷守一に師事しています。今回ご寄贈いただいた裸婦の作品は、中央美術研究所で描かれたものと考えられます。杉本の描く裸婦は健康的で、彼の人間に対するあたたかな眼差しが伝わってきます。

吉岡憲（1915—1956）は、川端画学校で絵を学んだ後、満州のハルピンの美術学校で絵を学び1940年に帰国します。戦時中は従軍し、ジャワで戦争画を描きました。戦後は独立美術協会に出品を続けながら、中央美術研究所で指導にあたっています。

自画像	杉本鷹		
裸婦	杉本鷹	1967年	
裸婦	杉本鷹		
裸婦	杉本鷹		
裸婦	杉本鷹		
婦人像	吉岡憲		
風景	吉岡憲		
静物	吉岡憲		

第５章　社会への眼・戦争への眼

終戦後、政治や経済の立て直しが行われ、1952年にサンフランシスコ講和条約が発効されると日本本土の占領時代が終わりました。しかし、世界に眼を向けると、1950年代には朝鮮戦争やベトナム戦争が勃発しています。日本国内ではレッド・パージと呼ばれる公職追放、1954年のビキニ環礁での水爆実験に伴う第五福竜丸の被ばく事件、1955年の砂川基地闘争、60年安保闘争など社会や政治が大きく揺れた時代でもありました。

1950年代の日本の美術界では、政治や社会を新たな切り口で描いた作品が発表されています。1946年から50年頃に美術雑誌で起きた「リアリズム論争」では、結論は出なかったものの様々な立場の美術評論家や画家たちにより、戦争画に対する反省を踏まえ、同時代の現実をいかに描くべきか、新しい時代の絵画の方向性について議論が行われました。戦後のリアリズム絵画のあり方の1つとして、画家たちが基地闘争などの現場に赴き、取材を経て描かれた「ルポルタージュ絵画」が挙げられます。彼らの作品は、従来のリアリズム絵画や写真とは異なるリアリティをもって我々に訴えかけてきます。また、同時代の事件だけではなく、自らが過去に体験した戦争を描いた画家たちもいました。山下菊二は戦地での体験、堀田操は終戦後のシベリア抑留体験をそれぞれの方法で表現しています。

脱線	中村宏	1957年	
富士二合	中村宏	1955年	
大通り	池田龍雄	1954年	
アメリカ兵・子供・バラック	池田龍雄	1953年	
埋められた魚	池田龍雄	1954年	
収穫	池田龍雄	1954年	
立ち退く人（小河内村）	桂川寛	1952年	
カウントのある風景	村上善男	1954年-1955年	
不安な都市シリーズ—不安な階段	石井茂雄	1956年頃	

作品名	作家名	制作年	寄託作品
血井（Ⅰ）	中村宏	1962年	
断章	堀田操	1953年	
放浪	堀田操	1952年	
祀られる戦士	山下菊二	1967年	○
葬列（ベトナム）	山下菊二	1967年	○
議長席	井上長三郎	1971年	

新収蔵作品より　井上長三郎、井上照子の絵画

板橋区立美術館では2015年に没後20年井上長三郎・井上照子展を開催しました。夫妻は池袋モンパルナス、戦後は板橋に暮らし、亡くなるまで絵画作品を発表しています。昨年度、ご寄贈いただいた2人の作品をご紹介いたします。

井上長三郎（1906-1995）は神戸に生まれ、大連で少年期を過ごした後に画家を志して上京します。太平洋画会研究所に学び、のちに新人画会を結成する靉光や寺田政明と知り合い、戦前は独立美術協会、パリ留学を挟んで美術文化協会に出品しています。長三郎は20代の頃から満洲事変をはじめとする時事的なニュースを絵画に取り込み、戦後は東京裁判やヴェトナム戦争、礼服姿の議員たちの姿を諧謔的に描くなど、社会に対する批判的な姿勢を生涯変えることはありませんでした。

井上照子（旧姓：長尾、1911-1995）は、京城（現・ソウル）に生まれ、女子美術専門学校（現・女子美術大学）入学を機に上京します。画家としていち早く自立することを考えていた彼女は、学校を辞め、独立美術協会の主催する研究所に通います。長三郎と結婚した直後に留学したパリでは、美術学校に通い、現地の美術展にも出品しています。帰国後は戦争による混乱や子育てのために、一時的に画業を中断していましたが、戦後は長三郎と共に自由美術家協会に出品しています。照子は自宅の庭の植物に着想を得た、豊かな色彩の作品を描いています。

風景（下板橋）	井上長三郎	1926～27年	
静物	井上長三郎		
風景	井上長三郎		
公園	井上照子	1938～40年	
まひる	井上照子	1953年	
作品B	井上照子		
青い景色	井上照子	1962年	
作品B	井上照子	1979年	

特別展示　「板橋の日本画」

板橋区立美術館では油彩画に加え、日本画、版画、彫刻、写真作品も所蔵しています。今回はコレクションの中から、日本画作品をまとめてご紹介いたします。

「日本画」という言葉は、近代以降、西洋より油彩画の技法が紹介された際に「西洋画」の相対的な概念として生まれましたが、技法自体は日本の近世以前からの伝統的なものです。紙や絹を支持体にして墨で描き、鉱物や植物、昆虫、貝殻などから採取した顔料を、魚や動物の皮や骨から作った膠（にかわ）の水溶液で練りあわせて着彩します。その色彩は、日本の自然や建造物を表現することを得意としています。

神鹿	今井珠泉	1978年	
かすみ網	佐藤太清	1943年	
冬池	佐藤太清	1955年	
磨崖佛〈弥勒〉	佐藤太清	1976年	
毓	西沢笛畝	1947年	
朝霧	佐藤太清	1978年	
富貴花	佐藤太清	1989年頃	
結因の銀華	平山郁夫	1986年	
亀遊戯図巻	伝　西沢笛畝		